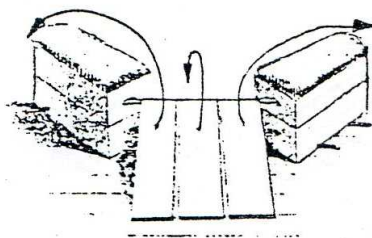


ふみきり板のうんちく

(1) 跳び箱のあなの不思議

これは、1800年ごろの跳び箱とふみきり板のイラストです。今では、2人でとび箱を運ぶためにある「あな」は、当時は、ふみきり板をささえるためのぼうを入れるための「あな」だったのでした。跳び箱とふみきり板の組み合わせで、跳び箱運動が行われていた時期もあったのです。



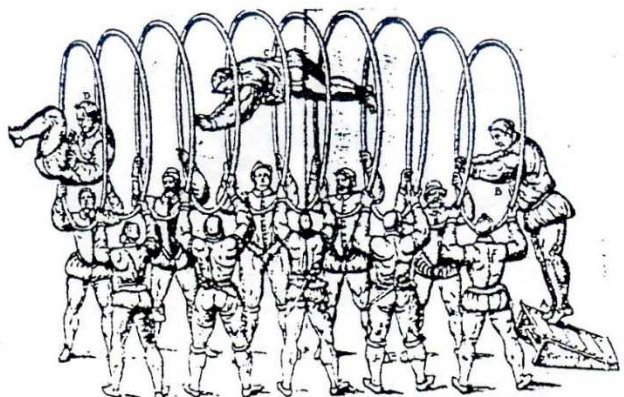
(2) 曲芸に使われたふみきり板

ふみきり板は、今では、跳び箱運動を行うためには、なくてはならないものとなっていますが、元々は別のものとしてありました。

一番古いふみきり板は、1599年に書かれたイタリアの古い書物に出てきます。この絵からもわかるように、ものをとびこすための

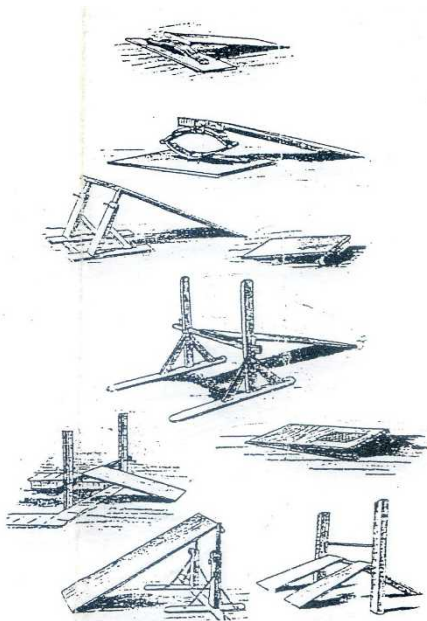
ふみきり板ではなく、空中で曲芸などをするために使われていたことがわかります。ふみきり板ととび箱が、ドッキングするのは1800年代に入ってからのことです。

現在のように、「ものを(とび箱を)とびこすためのもの」というよりは、「ふみきり板を使って、どれだけ長く空中にいられるか」とか、「どれだけ美しく空中で体の表現をできるか」ということを、当時の人々は求めていたのでした。



(3) 跳び箱・跳馬へ

ふみきり板を使って、跳び箱や跳馬を跳ぶことにより、より長い時間、空中にいたることができるようになります。それによって、いろいろな動き(技)を生み



出すこととなります。初めは、木で作られていたものが、とぶ目的によって、さまざまな形に変えられて、19世紀に入ってから、鉄のぼうや板と組み合わせたふみきり板が開発されるようになり、人々の跳躍は急にのびたのです。



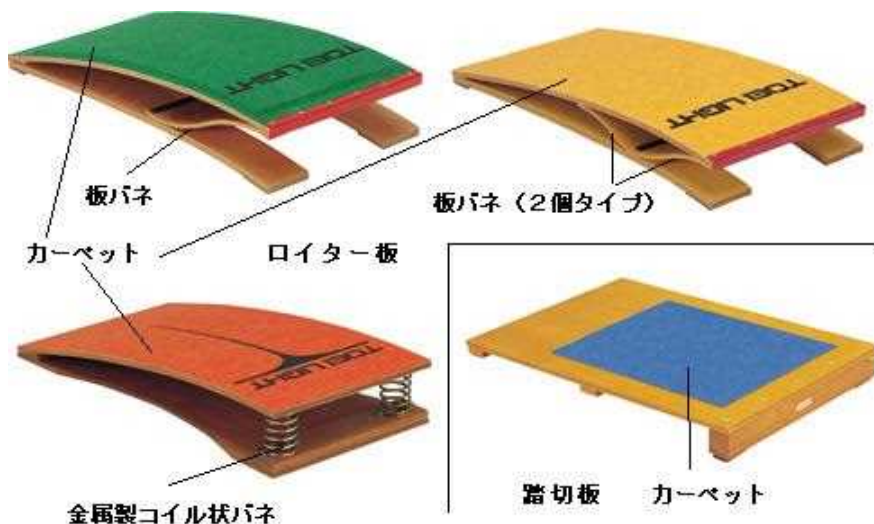
(4) ふみきり板からロイター板へ

1950年ごろになると、ロイター式ふみきり板が使われるようになり、さらに跳躍できるようになります。ロイター板というのは、踏み切る所が弾力のある木を重ねてある踏み切り板のことで、開発したリチャード・ロイターの名前をとって、「ロイター式 (Reuther model)」と呼ばれるようになりました。



学校で使われている踏み切り板には、板のバネがないふみきり板(右下)が多かったの

ですが、近年はロイター板も使われようになってきました。



→リオオリンピック種目別決勝、白井選手は新技(シライ2)で「銅メダル」を獲得。3回半もひねっている。このような技が出来るのも、跳馬(ヴォルテイング)と跳ねるロイター板があってこそできます。

